研　究　紀　要

音　楽　部　会

研究演奏　アルト・サクソフォン独奏　青森県立六ヶ所高等学校　教諭　村　上　康　太　・・・　1

研究テーマ　高等学校に求められている音楽の力　～「A表現(3)創作」の可能性を深める～
日本女子大学　名誉教授　坪　能　由紀子　・・・　1

新学習指導要領について　令和４年度高等学校各教科等担当指導主事連絡協議会報告
青森県総合学校教育センター　指導主事　道　川　里　奈　・・・　5

研究協議　全日本音楽教育研究会八戸・三戸大会の成果と課題、そして未来へ　・・・・・・・・・・・・・・・　6
司会進行　青森県立青森東高等学校　教諭　宮本　由紀乃
パネラー　研究授業①授業者　青森県立八戸東高等学校　教諭　新山　隆　健
研究授業②授業者　青森県立弘前実業高等学校　教諭　秋庭　潤
研究部　青森県立弘前南高等学校　教諭　木村　歩
研究部　青森県立弘前工業高等学校　教諭　澤田　元
助言　日本女子大学　名誉教授　坪能　由紀子

実践発表　多面的で段階的な創作の学び　～目指したい姿の具体化～
青森県立青森東高等学校　教諭　宮　本　由紀乃　・・・　9

部　会　の　動　き　・・・　10

研　究　テ　ー　マ　・・・　11

紀要編集委員　村　上　康　太（青森県立六ヶ所高等学校）

音　楽　部　会

研究演奏

アルト・サクソフォン独奏　　青森県立六ヶ所高等学校　教諭　村上　康太
ひとりぼっちの晩餐会
美女と野獣
輝く未来　　A.Menken　作曲

研究テーマ

高等学校に求められている音楽の力　～「A 表現(3)創作」の可能性を深める～

日本女子大学　名誉教授　坪能　由紀子　氏

講師紹介

東京藝術大学音楽学部楽理科卒。日本女子大学教授，東京藝術大学非常勤講師などを経て，現在開智国際大学教育学部教授，東京大学非常勤講師。2005-2008 年日本音楽教育学会会長。2015 年から日本音楽教育学会常任理事。中央教育審議会芸術専門部会委員，小学校学習指導要領解説音楽編作成協力者の他，文部科学省，文化庁，東京都等でも子どもの音楽と教育に関わる仕事に携わってきた。

専門は音楽教育学で，子どもの創造的な音楽活動に関する研究のかたわら，国内外でワークショップ，講演，コンサートの企画等を行っている。アメリカ，カナダ，イギリス，ドイツ，ギリシャ，マレーシア，タイ，中国，韓国等での音楽づくりワークショップ・講演・研究発表の他，日本現代音楽協会主催の童楽シリーズの企画，ＩＳＣＭ横浜大会の「こどもみらい」フェスティヴァルの企画，ロンドン・シンフォニエッタやギルドホールスクール等との教育プログラム共同企画などがある。

「新しい音楽教育を考える会」(Institute of Creativity in Music Education) を主催。１年に数度の研究会の他，International Journal of Creativity in Music Education を出版している。

高等学校における音楽づくりの授業について

音楽づくり・創作が導入されたのは１９８２年のことである。それから３０年以上にわたり，音楽づくりのワークショップを実施し，数百回に及んでいる。ある都道府県の小学校では，音楽づくりの授業が広がっていなかった。そこでワークショップを実施したところ，その後に音楽づくりが広がっていったこともある。

高等学校でのワークショップは今回が初めてである。高等学校の教師は創作に興味がないと思っていたが，本研修前に実施したアンケート結果を見ると，青森県の高等学校では音楽づくりが実施されていると認識している。

今回は誰にでもできる音楽づくりをテーマに，楽器が弾けなくても，楽譜が読めなくても，障害があっても，低年齢でも，高齢者でもできる音楽づくりを目指す。そこで即興を使っていく。最近では特別支援学校での音楽づくりの研究をしており，特別支援学校に通う子どもから，普通学級に通う子どもが学ぶことが多くあると考えている。私は小学生・中学生は実際に教えたことはあるが，高校生に対しては教えたことがない。先生方の意見や高等学校の生徒の様子を聞きながら，全体で共有して今回の研修を進行したい。

１　即興的な表現のために（音楽ゲーム）

演習①　手拍子まわし

１回目：1 拍ずつ隣の人にまわす

→各個人のキャラクターがわかる。小学校では授業の導入や朝などの時間に常時活動とする学校もある。
その日の子どもの体調や気分なども把握することができる。

２回目：できるだけ大きい音で
３回目：できるだけ小さい音で
→音に出し方があり，その人によって表現が違うことがわかる。教師は子どもの音や表現，変化に気付くようにすると良い。またルール破りは音楽において大事なことである。これによりいろいろな角度から物事を考えられる子どもであることがわかる。
４回目：できるだけ早く
→１人飛ばしなど事故が起きてしまう。これを取り上げながら，次の演習へつなげる。
５回目：１人飛ばし
６回目：１人飛ばし逆回り
→より難しくするにはどうすればいいか。
７回目：２人飛ばし
→変化させるにはどうすればいいか。

演習②　足拍子まわし　１拍ずつ隣の人にまわす
→より音色を変化させるためにはどうすればいいか。

演習③　トーンチャイムまわし
１回目：１拍ずつ隣の人にまわす
２回目：１人何回鳴らしてもいい　終わったら次の人へ合図をして，隣にまわす（１つのメロディーを全員で作る）
３回目：黒（ド♯・レ♯・ファ♯・ソ♯・ラ♯）のみのペンタトニックで。それに教師が黒鍵でピアノ伴奏をする。
４回目：白（ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ）のみ。それに教師がソ・シ・レ・ファを中心にピアノ伴奏をする。
５回目：ＢＡＣＨモチーフ
Ｂ→Ａ→Ｃ→Ｈが１拍ずつ繰り返し。Ｂと同時にＧも演奏する。Ｇはドローンの役割。
その他の人はＢＡＣＨの動きに合わせて
１周目は１拍ずつまわし，２周目２人同時に２拍ずつまわし，３周目好きな場所で自由に鳴らす
終わりはＧとＢ担当者に任せる
※その他のモチーフにＳＥＡモチーフがある。Ｅｓ ＥＡモチーフは作曲家の武満徹も使用している。

２　音楽の仕組みに注目しよう

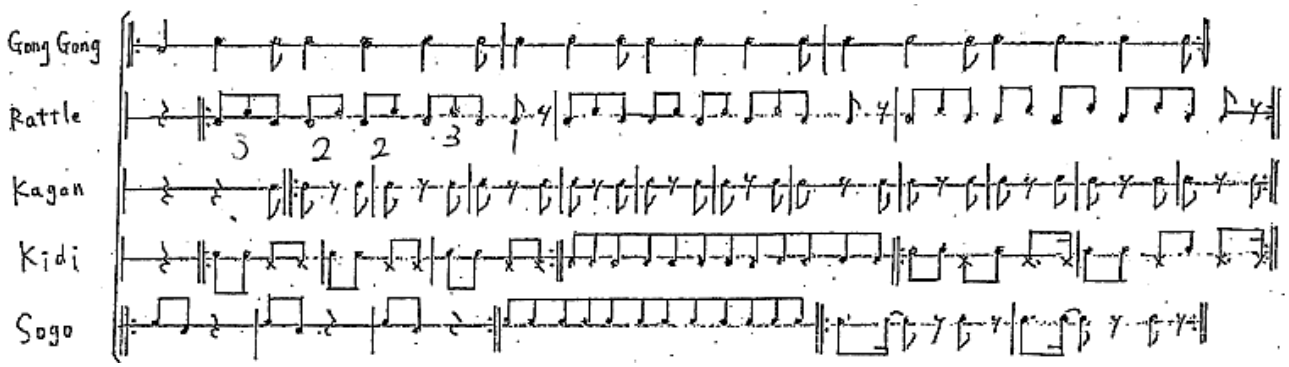
音楽の構造をつくる４つの役割がある。

飾る，答える	…	オブリガート等
変化する	…	メロディー
反復する	…	コード，オスティナート
支える	…	ベース（ドローン）

小学校学習指導要領では低学年に反復する，呼びかけと答え（合いの手など２声部の掛け合い），中学年では変化するという言葉が出てくる。上記の４つの役割と対応する内容である。
世界の音楽を鑑賞してみると，４つの役割以外の関係性はないと考えている。教育出版や教育芸術社の教科書では，この４つの関係性が出てきている。この４つの役割を考えることで，音楽がわかりやすいものになり，この見方・考え方はいろいろな音楽へと広がっていく。自分の好きな音楽において，４つの役割を考えてみると良い。

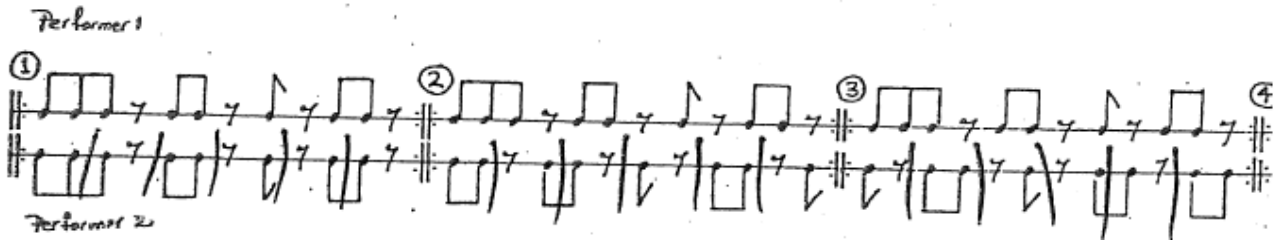
３　付加リズムと分割リズム

スティーブ・ライヒ作曲『クラッピング・ミュージック』『Music for Peices of Wood』は，アフリカ音楽のエウィ族のアグバザという音楽から影響を受け，作曲された。以下の楽譜とＵＲＬを参照。



https://youtu.be/tln6T79eEz8

２パート目（Rattle）は３＋２＋２＋３＋１で考える。これを付加リズムという。これを用いた楽曲がライヒの『クラッピング・ミュージック』である。



これは３＋２＋１＋２で区切った付加リズムである。対義語は分割リズムであり，これは２拍や４拍などで均等に区切ったものである。２パート目をずらすために，４＋２＋１＋２のように初めに１つ音を追加すると考えやすい。

『テイク・ファイブ』は３＋２で分割できるなど，ジャズにもこの特徴がみられる。ルーツは全てアフリカの音楽である。またインドやアラビア音楽にもこの特徴がみられる。

小学校の教科書に『Mangwani Mpulele』がある。２拍で区切るか，３拍で区切るか，拍のとり方で楽曲の印象が異なってくる。マライカもその例である。

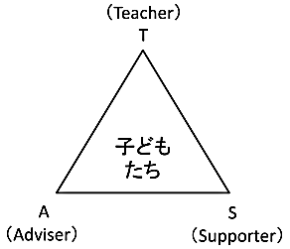
4　様々な音階ー教会旋法

教会旋法でできた曲にはどのような楽曲があるだろうか。例えばビートルズの楽曲やグリーンスリーブス，スカボローフェア，もののけ姫などが挙げられる。クラシック音楽にも教会旋法を用いた楽曲が多くある。以下はその例である。

ドリア：ダッタン人の踊り，ルーマニア民族舞曲
フリギア：ヨーロッパ周辺国に多い。例えばリスト，リムスキーコルサコフ，ブラームスの作品，Raga Bhairavi（インド音楽）
リディア：M. デイビスのモードジャズ
ミクソリディア：ビートルズ

自分の国の音楽を素材にした作品でこの特徴がみられる。例えばポーランドの舞曲，レナード・バーンスタインのヤング・ピープルズ・コンサートのモード，バルトークなどにも教会旋法が用いられている。また教会旋法の他に，全音音階やブルーノートスケールが挙げられる。

※右図は坪能氏が提唱しているＴＡＳモデルの模式図。Ｔの教師が授業の主体となり，Ａの研究者や作曲家が音楽的なアドバイスを行い，Ｓの演奏家が生の音でサポートして，協働の授業を試みている。



演習④　マリンバでの即興（４人１組）

１人目はドローン，２人目は反復，３人目はメロディー，４人目はメロディーの飾り・合いの手を担当する。終わりの指示やきっかけはドローン担当者が行う。

１・２回目　全ての音を自由に使用
　３回目　黒鍵のみ（ペンタトニックで）
　４回目　ドリア（レミファソラシドレ，レが中心音だと留意する）　ドローンはレラ
　５回目　フリギア（ミファソラシドレミ）　ドローンは少し複雑なリズムにしてみる
　６回目　リディア（ファソラシドレミファ）　ドローンはファ
　７回目　ミクソリディア（ドレミファソラシ♭ド）　ドローンはド

演習⑤　ピアノでの即興（２人１組）

メロディーは黒鍵のみ，伴奏（シ，ファ♯，ソ♯，ド♯）
→ドビュッシーの『塔（パゴダ）』に似ていることがわかる。ドビュッシーは１８８９年パリ万博でガムランを聴き，ペンタトニックで作曲しようと試みた。

子供にガムランの『クボギロ』を鑑賞させてから，即興をさせた。リディアでの即興ではノルウェー人にメロディーを担当してもらった。それぞれの国に，それぞれの音楽にふさわしい音や音階があることがわかる。

５　ペンタトニックは世界をつなぐ

日本には５音音階がある。陽音階－民謡音階，陰音階－都節音階，律音階，沖縄音階が挙げられる。韓国の「アリラン」やスコットランドの「蛍の光」のように，世界の音楽にも５音音階が使われる楽曲がある。特にヨーロッパ周辺諸国に多く見られる。音楽の授業では７音の西洋音楽を中心に考えられているが，５音中心の音楽を取り入れることでより一層音楽の世界が広がるのではないかと考える。現在はペンタトニックで授業を考えるために，ブータンの音楽を用いた研究をしている。

演習⑥　研修のまとめとして，いろいろな楽器を用いて４人１組で音楽創作を行い，発表する。

研修のまとめ

音楽で何をすべきであるか。技術を教えること，読譜力を高めることのために音楽の授業があるわけではない。また，ブラスバンドや合唱において金賞を目指すことは音楽の本質ではない。それでは音楽で何ができるのか。それはクリエイトすることだと考える。互いがアイデアを出し合うことで，自分がよりクリエイティブになっていく。このクリエイティビティが他の活動にもつながり，音楽ができることではないか。東京大学では芸術創造連携研究機構が設置され，あらゆる学部の先生方が集い，全員で芸術活動を行っている。芸術を中心にクリエイティブな人づくりをするためのものである。コンポーズは作曲の技法を習うことであり，音楽づくりとは異なる。即興を通じたり，音楽的対話をしたりしながら，クリエイティビティを高めることが音楽づくりであり，これは世界的に注目されている。クリエイティビティや音楽的対話，即興の大切さは，昨年の全日本音楽研究大会での秋庭先生の授業から学んだことである。ぜひ音楽の意味を子どもたちと見つけ出し，新しい音楽の世界を作っていってほしい。全国的に見ても高等学校では創作に関してまだ興味がないのではないかと思っている。今回の研修の経験を大切にしながら，本県からその考えを広げていってほしい。

新学習指導要領について

令和４年度高等学校各教科等担当指導主事連絡協議会報告

青森県総合学校教育センター　指導主事　道川　里奈　氏

１　学習指導要領改訂について

目標の改善として，旧学習指導要領（平成２１年告示）から柱書を追加し，（１）知識及び技能，（２）思考力・判断力・表現力，（３）学びに向かう力・人間性と細分化された。

また内容に関して，アが思考力・判断力・表現力，イが知識，ウが技能のように目標と同様に細分化された。これらはそのまま学習指導の目標となりうるものである。学びに向かう力・人間性は，芸術科・音楽科の目標（３）に記載されており，主体的に学習に取り組む態度を評価する。

音楽的な見方・考え方とは，「感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること」である。

高等学校にも共通事項が新たに示された。

指導内容の改善について，実感を伴いながら音楽を理解し，表現や鑑賞などに生かすことに留意する。例えば「Caro mio ben」の授業で「再現部にある ppp には作曲者のどのような思いが込められているだろう？」という問に対して，ｐで歌う，pp で歌う，ppp だと表現はどう変化するのか考えさせたり，実際に歌ったりしながら，歌唱の表現や問の答えにつなげる。

「技能」とは，創意工夫の過程でもった音楽表現に対する表現意図に応じて，その表現意図を音楽で表現する際に自ら活用できる技能（技能習得の過程に思考・判断する）のことである。例えばフェルマータの意味である「ほどよく延ばす」とは，どのくらい延ばせばいいのか，このくらい延ばせば曲の雰囲気に合っている感じがするというように思考することである。

言語活動の充実について，言葉によるコミュニケーションを適切に位置づける（自分の音楽の捉え方を紹介する際に，なぜそう思ったのかまで深める言語活動をする）。言語活動を目的化せず，授業の最後は音や音楽で終わるものにすることが重要である。

２　指導と評価の一体化

思考力・判断力・表現力の表現力は表出することである。思考力・判断力・表現力の評価の観点は，共通事項（１）アに関することを前半に置き，後半に事項アを記載する。

教材スタートの授業ではなく，資質・能力スタートの授業を実施することが大切である。例えば，「運命を鑑賞させたい」ではなく，「音楽における形式感について考えさせたい」というスタートにすると良い。

３　ＩＣＴの活用

録画機能での振り返りや改善，音楽制作ソフト（Chrome Music Lab，Garage Band，Flat for Education）を活用した創作など様々な活用ができる。創作の学習で ICT を活用する際は，協働の学びができているか，個人作業のみで終わっていないかなどに留意して実施する。また自分で作った旋律を口ずさむなど，自分の作品への愛着や愛情など作品を大切にする心情を育むようにする。

研究協議

全日音研八戸・三戸大会の成果と課題，そして未来へ

	司会進行	青森県立青森東高等学校	教諭	宮本　由紀乃
パネラー	研究授業①授業者	青森県立八戸東高等学校	教諭	新山　隆　健
	研究授業②授業者	青森県立弘前実業高等学校	教諭	秋庭　　潤
	研究部	青森県立弘前南高等学校	教諭	木村　　歩
	研究部	青森県立弘前工業高等学校	教諭	澤田　　元
		助言　日本女子大学	名誉教授	坪能　由紀子　氏

宮本

事前アンケートより，本県では音階・音列を用いた創作や和音・コードを用いた創作，和楽器での創作などが行われていることがわかった。

創作を行う上で困ることは，どのように評価すればいいのか，どのように創作を取り入れるかであると思う。新学習指導要領においての資質・能力を育むためには創作が最適ではないかということから，創作の授業を全日音研で取り上げた。

高等学校では「見つけ出そう」をテーマに追加し，生徒が主体的に自分たちで気づき音楽を作るということを目的とした。今振り返えるとこれは達成できたと考える。今後の課題は評価をどうするのか，そしてスモールステップで学びを積み重ねることである。何を試行錯誤するのかを教師，生徒が理解したうえで授業を展開することで，新しい価値観の創造や生徒が新しい価値観を作ることを創作で学ぶことができる。固定概念を取り除き，生徒が注目していることをファシリテートするのが教師の役割ではないだろうか。研究授業を行った２名の先生に研究部の先生を交え，ファシリテートしながら創作をしたこと，題材を通して生徒がどのように変化したのかについてお話を伺いたい。

新山

ファシリテートに関して，百石高校は素直で，元気が良く，意欲的に取り組む生徒が多い。しかし，どう感じたのかなどを質問すると何となくなど，言葉でうまく表現できない生徒が多かった。この点を踏まえてどのように次の題材へ進むのか苦労していた。今回は音楽の面白さを見つけようという目標を掲げたが，教師側からは面白いと捉えられることが，生徒が面白いというのを引き出すことが難しい。長い期間を通して積み重ねると，この感覚は磨かれるのではないかと考えている。

秋庭

即興演奏を中心にして，言語活動で終わらないようにすることに留意した。八戸高校の生徒は楽譜から逃れられず，楽譜を使ってグループワークしながら１つの作品を作ることや，自分たちの思いを持ったり，協働したりしながら音楽を作ることはできるが，この活動だけだと音楽の本質に触れられていない。そのため，音楽的な行動や音楽に触れる時間を増やすために即興という手段を取った。音楽の本質とは何か。それは音楽の４つの役割，そして１音１音へ集中することであると考える。私は即興演奏中に気を張り，生徒の演奏の良いところに気づき，声掛けをしながら，最後の即興に向かわせた。生徒自身だけでは何が面白かったのかになかなか気づけない。それを教師が拾い上げて，生徒に気づかせ，理解させることを繰り返すことで音楽の面白さが理解できるようになるのではないだろうか。そしてそれは次の面白いにつながっていく。音楽のその瞬間に教師は取り上げ，生徒に感動・納得・理解させ，同じことを繰り返すことで，精度が上がったり，感覚が高まったりしていくだろう。そうすることで他の演奏により興味を持ったり，より面白いものを生み出そうとしたりすることができる。これからの課題は，八戸高校は音楽に興味があり，物事をすぐに理解できる生徒が多いが，そうでない生徒に対して１時間など短い時間で完結できるクリエイティブな活動とは何かを考えていきたい。また，どのような人でも協働的にできる授業のスタイルを考えていきたい。

坪能
　いずれにしても教師は子どもの音を聴くことが大切である。子どもの音をどのように聴くのか，そしてそれをどのように授業へ還元するのかが音楽づくりにとって大事となる。そしてルール破りをしたら褒めることも大切である。これをすることで次の時間から子どもの目の輝きが変わる。例えば，教会旋法のドリアでの創作途中に黒鍵を弾く。先生は違うと指摘をするが，そのあと褒める。違うことをやって，しかも効果があったことを褒めると，子どもは次に何か新しいことを始めようという気持ちになる。

宮本
　短い時間での創作活動はどのようなものがあるか。

木村
　歌川広重の絵を見て，楽器でないもので表現する活動をしている。これは楽譜にとらわれずに表現できるところが良い。またサイン音を用いて，生活の中での音を創作する活動もできる。これは音の重ね方やつなげ方に注目して工夫しようという目標で行った。楽譜や音符にとらわれない，その空間だけで作るものは効果的だと考える。

勘林
　ギターを使って創作活動を行った。昨年の秋庭先生の研究授業と同じ流れで実施した。初めはギターを鳴らすだけであったが，生徒から工夫したいことが出てきた。その後に音楽の４つの役割を考えさせたが，初めはほとんどの生徒が反復ばかりを演奏し，協働的な音楽づくりは難しかった。そのため，教師が生徒一人一人に役割を指定するというサポートのより，音楽づくりが上手くできた。楽器を変えると簡単になるのかもしれないが，ギターのみでも音の出し方の工夫が出てきて面白くなった。

宮本
　秋庭先生の授業にあるミッションは発問として書かれているので，１時間に１つ取り上げて，分割してできる題材であると考える。また器楽のまとめなどでは，ペンタトニックを使った新山先生の授業も行うことができるだろう。

澤田
　今回の研究はどうやって創作をしようかということから始まった。生徒が音楽に対して答えを求めたがること，そして耳に入るものを音楽的である，音楽的ではないという判断は教師側の感覚で，生徒は実際どうなのかということに悩んだ。昨今では正解を求めたがる生徒が多い。サイン音，アラート音など生活の中で聴こえる音や音楽は普段耳にする。どの音を鳴らしても何かのサインやメロディーになるのではないかと考えさせる。タブレットなどを使ったり，教師が生徒の考えを踏まえて音を鳴らしたりして，生徒へ様々な提案や助言をしながら，作ったものに対して，正解はないということを伝えて創作を行っている。

木村
　創作の導入はどうしているか？

新山
　コダーイメソッドを通年で行っている。そのため生徒は手拍子でのリズム創作に慣れている。

秋庭
　創作の導入としては自分と同じリズムを叩く活動をした。そして，生徒自身が自分は耳が良いことを確認させる。生徒たちはカラオケに行くと難しい歌を歌えているので，自分が思っている以上に高い聴音スキルを持っていると認識できる。徐々に難しくしていき，何となくリズムを叩いている段階で，自然と創作していることに気づかせる。生徒自身が持つ力に気づかせ，その後の即興につなげていくことを心掛けた。

宮本
　自信のない生徒や自己肯定感が低い生徒，人前で間違いたくない生徒に対して，音楽でどのようなことができるか。私は教師の言葉がけで自信をつけさせ，活動につなげたいと考えている。生徒は何となく褒められても嬉しくはない。具体的に褒められると喜ぶ。ファシリテートする際には，生徒は何を工夫しているのか，それに対して褒めると言葉だけでも自信が湧き，意欲的に取り組むことができるのではないか。

坪能
　ファシリテートすることは難しいことである。ファシリテートを言語でするのか，音のみでするのか。日本では言語化されることが多い。言葉で言うよりも，教師も音で子どもに答えてあげる。子どもと教師との呼びかけと答えを音楽で行うことも必要になってくるだろう。

村上
　音楽が苦手な生徒に対してはどうすればいいか。

宮本
　一気に説明するなどして教えるよりも，わからなくなったら質問に答える授業展開が良いのではないか。説明しすぎないで，大事なことだけを教える。また生徒個人が困っていることを全体で共有する。今日の目標はとりあえずやってみることにする。そして，「反復や変化に着目して創作しよう」「反復や変化を操作してみよう」「音の重ね方を話し合おう」「音を聞き合って創作しよう」など，今日の目標や評価は何なのかを黒板に書く。目標や評価を明確化しながら授業を行い，生徒の疑問や質問に教師が答えるといいのではないか。

坪能
　音楽のイメージはどうとらえているだろうか。「情景描写的に音楽を創作する」，もしくは「音楽的なイメージで音楽を創作する」という２択である。イメージという言葉は，昨今の小学校では後者である。情景描写だけでは，ただの効果音になってしまう。音楽的な構造をもとに創作するように学習指導要領が変わったのが２００８年である。例えばクラシッククラブというテレビ番組において，以前の番組の解説ではＮＨＫが情景描写をファシリテートしている場合が多い。それを書くことが普通だったが，今の番組では音や音楽そのものに解説の焦点を置くようになってきている。これは学習指導要領の影響だと思う。諸外国ではまだまだ情景描写が主流で，日本は進んでいると考える。ロンドンシンフォニーオーケストラの楽団員が来日し，東京で音楽教育の創作を指導したことがあった。「犬が海に泳いで行って，溺れて，誰かが助けに来ました」という物語をもとに音楽を作ろうという活動をした。そのときの演奏家は，子どもは情景がなかったら音楽が作れない，幼稚園に行ったら音楽がわからないと私は非難された。私も幼稚園で初めて指導したときに，大きな音だけでは幼稚園児にはわからないと園長に言われ，大きい音はぞうさんの音と言ってくださいとお願いされたが，私は拒否したことがある。大きい音のように抽象的な言葉で指示することにより，幼稚園児の音に対するイマジネーションが広がっていくのを感じた。イメージ（情景描写）と音楽を結びつけない方がいい。

熊沢
　高等学校の指導要領の内容部分に「自己のイメージを持って」とあるが，どう考えるか。また，思考力・判断力・表現力の項目に「自己のイメージを持って表現を工夫する」ということが，歌唱・器楽・創作にある。どのように考えればいいか。イメージというものが生徒へうまく伝えることが難しい。

坪能
　そういうときは言葉をできるだけ使わないで，言語化しないで音に直接向かってほしい。イメージを持って作ってとは言わないように心がけるなど声掛けにも工夫が必要である。

宮本
　印象をイメージとして捉えていたことが強いが，音楽の要素をどのように工夫したいのかという思いがイメージだと考えている。

実践発表

「多面的で段階的な創作の学び～目指したい姿の具体化～」

青森県立青森東高等学校　　教諭　　宮本　由紀乃

教師が教え込まない授業を目指している。しかし，大事なことは教える。生徒が考えられることは考えさせる。生徒の疑問・質問には丁寧に答える。生徒とコミュニケーションをすることで生まれる授業を目指している。

年間指導計画について，芸術科音楽・美術・書道の３科目が協働して芸術の見方・考え方を育てている。その後に芸術の中の音楽を考える，そして芸術って何だろうという問に向かう。

初めは気づきに気づく活動を芸術科全体で行った。リンゴをテーマにブレーンストーミングを通して深めた。１００個以上リンゴに関わることを挙げてみようという活動をすると，５０個程度で生徒の手が止まったため，タブレットでリンゴについて調べさせるとさらに増やすことができた。この活動により１つのものの周りにはいろいろな事象があり，それらから１つのものができているということがわかる。この活動を行ったことで，次の活動においてもブレーンストーミングが容易にできるようになった。

教師の役割は生徒が知らない音楽の世界に触れさせることだと考える。またそれらの音楽が持つ世界感を体験させることである。私は世界感への導入の知識は楽しくできるようにクイズ形式で行っている。クイズの内容は生徒の質問から作っている。生徒の質問からクイズを作っていくと，それに関わる多くの知識が理解できるものとなる。また読譜など音楽においての知識や技能を習得することも，さりげなく楽しみながら学べるようにしている。授業の終わりには，生徒の考えの変化や気が付いたことを付箋に書かせている。これにより生徒の授業前後の変容がみられ，評価につなげることができる。

年間指導計画では，「音楽って何だろう」をベースに，共通事項と歴史・音楽のルーツ・チャリティ活動などを通して学びを深めさせたいと考えた。生徒にとって学習が楽しい時は，これまでの学びがつながったときである。歌舞伎を取り上げたときは，学習の最後に歌舞伎を知らない人へ歌舞伎の面白さを紹介する活動をして，まとめとしている。教師の発問をしっかりと決めて，生徒の話によく耳を傾けながら，生徒が知らない音楽の世界感を教えている。

生徒はクラスの前で歌のテストは嫌だという。しかし，授業を通して最後には気負わず，人前でできるようになることを目指している。私はテストではなく，発表やコンサートというようにしている。手拍子まわし，創作など音楽の様々な活動を通して，恥ずかしいと思うことが自然と消えることを目指す。完成した音楽よりも音楽を作り上げるプロセスが大切である。また自分なりに工夫することはいいことであるということを実感させたい。創作の授業を通してこれらはわかったことであり，創作は気づきを増やすものであると考える。

ペーパーミュージックを鑑賞させ，「これは音楽か？」という問に対して，音楽だと思うところを挙げさせると，生徒からは間やリズム，強弱など共通事項に関わる言葉が出てくる。

年間指導計画に創作や常時活動を取り入れて，充実した授業にしてほしい。

部　会　の　動　き

自　令和　４年４月　１日
至　令和　５年３月３１日

Ⅰ　役員会　　令和　４年４月１９日(火)　於　青森県総合社会教育センター

１　部会長挨拶
２　議長選出
３　議事
（１）令和３度　事業報告
（２）令和３年度　会計監査報告
（３）令和３年度　決算報告
（４）役員改選

部　会　長	清川　和幸（八戸東高校　校長）	
副　部　会　長	髙谷　浩子（八戸北高校）	山崎　　学（三本木農業恵拓高校）
東青下北地区委員	工藤加奈子（青森高校）	宮本由紀乃（青森東高校）
	熊沢　愛理（青森中央高校）	
中南西北地区委員	猿賀　智美（弘前中央高校）	工藤　賀大（東奥義塾高校）
	澤田　　元（弘前工業高校）	
三八上北地区委員	新山　隆健（八戸東高校）	田中　拓也（八戸高校）
	荒尾安希子（七戸高校）	本田　敦子（三沢高校）
監　事	藤村　美香（弘前高校）	新谷　雅子（青森南高校）
全日音研理事	田村智恵子（三本木高校）	
紀要編集委員	村上　康太（六ヶ所高校）	
事務局担当	秋庭　　潤（弘前実業高校）	
会計担当	勘林　稚菜（青森工業高校）	

（５）令和４年度　事業計画案
（６）令和４年度　予算案
（７）会則審議
４　その他
（１）今後の担当地区について
（２）異動情報について
（３）その他

Ⅱ　研究大会

１　期　　日　　令和４年８月９日(火)～１０日（水）
２　会　　場　　青森県立青森東高等学校
３　テ　ー　マ　　高等学校に求められている音楽の力　～「A 表現(3)創作」の可能性を深める～
４　講　　師　　坪能　由紀子　氏（日本女子大学名誉教授）
５　日程および内容

第１日目
13:00 ～ 13:30　研究大会開会式
研究演奏　アルト・サクソフォン独奏　　村上　康太（六ヶ所高校教諭）
13:50 ～ 16:00　講義・演習
高等学校に求められている音楽の力　～「A 表現(3)創作」の可能性を深める～

第２日目
10:00 ～ 10:40　青森県高等学校教育研究会音楽部会総会
新学習指導要領について　　道川　里奈（県総合学校教育センター指導主事）
10:40 ～ 12:00　研究協議　「全日音研八戸・三戸大会の成果と課題、そして未来へ」
実践発表　「多面的で段階的な創作の学び～目指したい姿の具体化～」
宮本　由紀乃（青森東高校教諭）
12:10 ～ 12:30　研究大会閉会式

研　究　テ　ー　マ

紀要	年度	研　究　テ　ー　マ	会　　場	会員数(1,2希望計)	大会参加者数	大会発表者数
22	(昭和)52	○鑑賞指導について	八戸西高	57	43	1
23	53	○歌唱を主体とした授業の進め方について	金木高校	58	42	2
24	54	○指揮法及び合奏法について	青森南高校	60	45	2
25	55	○青森県の民族音楽について	三本木高校	64	46	2
26	56	○編曲の実際と合奏指導	弘前南高校	64	46	4
27	57	○リコーダーの指導法について	田名部高校	64	44	2
28	58	○グレゴリオ聖歌からポリフォニーにかけて	八戸東高校	64	51	1
29	59	○吹奏楽の指導法について	板柳高校	65	52	2
30	60	○音楽教育における機器の利用	青森戸山高校	68	47	3
31	61	○グレゴリオ聖歌からポリフォニーにかけて　その２	青森工業高校	67	64	2
32	62	○授業における電子楽器の活用について	六戸高校	70	57	1
33	63	○授業における発声指導について	弘前高校	71	57	1
34	(平成)元	○編曲の実践について	大湊高校	76	49	1
35	2	○実践的指揮法について	八戸東高校	75	55	1
36	3	○音楽の楽しさに対する感性の高まりを持たせるために芸術を愛好する生徒を育てよう（東北音研と併催）	弘前一中 弘前市民会館	75	54	2
37	4	○コンピュータと音楽	五所川原農林高校	76	55	1
38	5	○リコーダーの基本奏法と指導について	大湊高校	69	43	1
39	6	○リトミックの理論と実践	六ヶ所高校	69	40	3
40	7	○合唱表現の可能性について	南郷高校	64	42	1
41	8	○現在に生きるガンバ	中里高校	67	50	2
42	9	○コンピュータを利用した作曲・編曲の試み（東北音研と併催）	青森東高校 青森市文化会館	71	58	1
43	10	○鑑賞指導について	岩木高校	67	56	2
44	11	○マーチングバンドの指導法について	六戸高校	64	46	0
45	12	○ギター奏法の指導法について	大畑高校	64	45	2
46	13	○郷土の伝統音楽について～津軽三味線～	鰺ヶ沢高校	63	46	1
47	14	○和楽器にふれる　～箏～	青森戸山高校	63	44	1
48	15	○ドイツリートを通して、歌唱表現を深める工夫をしよう（東北音研と併催）	八戸西高校 八戸市公会堂	62	39	1
49	16	○和楽器にふれる　～篠笛～	六戸町文化ホール	64	41	1
50	17	○学習評価について　　○ハンドベルを楽しむ	黒石高校	59	44	1
51	18	○教材へのアプローチのしかたについて	ふるさと交流センター（つがる市）	57	40	1
52	19	○リズムを身体で感じよう！～ボディ・パーカッション～	東奥はちのへホール	56	41	1
53	20	○授業における発声及び歌唱指導法	青森高校	53	42	0
54	21	○「見つける　生かす　つなげる」授業をめざして（東北音研と併催）	弘前第三中学校 弘前市民会館	49	41	1
55	22	○リコーダーの指導	まかど温泉富士屋ホテル	48	40	0
56	23	○鑑賞指導について　～指導の内容と方法～	生涯学習交流センター「松の館」	49	36	1
57	24	○歌舞伎の黒御簾音楽入門	はっち・グランドサンピア八戸	49	32	2
58	25	○ゴスペルを歌おう！　～ゴスペルの魅力に迫る～	岩木文化センター「あそべーる」	48	30	2
59	26	○サウンドスケープの技法をもとにした授業展開	むつグランドホテル	52	30	2
60	27	○価値判断を伴う鑑賞と思いや意図をもった表現を関連させた授業づくり（東北音研と併催）	青森東高校 アップルパレス青森	49	34	2
61	28	○授業における作曲・編曲の指導について	八戸プラザホテル	43	27	3
62	29	○世界の音楽を体験する　―聴く・奏でる・つくる―	弘前パークホテル	44	30	4
63	30	○心に響く和太鼓　～和太鼓の魅力を生徒に伝えるためのアプローチ～	青森南高校	44	36	3
64	(令和)元	○コダーイ・アプローチに基づく音楽リテラシーの探求	弘前パークホテル	48	35	2
65	3	○ひろげよう　つたえよう　こたえよう　見つけ出そう	八戸東高校	43	25	2
66	4	○高等学校に求められている音楽の力～「A 表現(3)創作」の可能性を深める	青森東高校	35	22	1